

# 世界はいま——〈モダニティ〉がロンドン ではなく、レソトで問われる理由

キャロル・グラック  
(コロンビア大学)

まず、ひとつの話をしよう。1983年、アフリカ南部に位置するレソト王国でのことだ。レボナという一人の男性が、あたらしく家を建てることについて話をしていた。セメントの床と鉄骨の屋根からなる四角形の家を、彼は〈ヨーロッパ・スタイル〉だと考えていた。レボナがそのように語っていた相手は、アメリカから来た文化人類学者ジェームス・ファーガソン。彼がそのとき寝泊まりしていたのは、泥と石でつくった壁や、草の屋根からなる、丸い形をした伝統的な家で、夏は涼しく冬は暖かい。ファーガソンにとっては幸運なことだった。良心的な研究者である彼は、なぜレボナがそのような家を、すなわちレソトでは実用性が低いのにコストばかり高かかってしまう家を建てたいのかと、問いかけた。あらゆる面で、この〈地方〉のソト族が住む丸い伝統的な家に利点があるというのに、なぜ〈ヨーロッパ〉の家をつくりたいのかと尋ねたのだ。レボナは、この学者の目を見て問い返した。「きみの父さんはアメリカでどんな家を持ってるんだ?」「丸い家か?」と。ファーガソンは、長方形だと答えた。「草の屋根か?」—「いや、違う」／「床に牛のフンが転がっていたりする?」—「いや」／「部屋の数は何くらい?」—「だいたい10くらいだと思う」。その文化人類学者は、レボナからの問いに小さくつぶやいて答えていた。少し考える間をおいて、レボナはこう言った。「そこに向かって、私たちは進んでいきたいんだ」と。

若く誠実な文化人類学者であるファーガソンが、このことを反省してみて気付いたのは、〈ヨーロッパ〉の家をレボナが熱望していることが、西欧の模倣といった単純なことからでなく、ファーガソンの言葉をひくなら、「それまでとは違う生活条件——世界における自身の立ち位置、すなわち生活水準——を得る機会への強い権利主張」であるということだった。「そこに向かって、私たちは進んでいきたい」という言葉は、そのことを端的に言い表したものだ<sup>1</sup>。

ここで語られているような、一変した生活条件へと向かう方向性にたいして与えられた言葉のひとつが〈モダニティ〉である。しかし、〈モダニティ〉とは、正確には何を意味しているのだろうか。この問題への答えは、問答がなされるタイミングによってのみ異なるだけではない。場所、すなわち、ある人が暮らしている国によっても変わるし、当人がその国のなかで占めている地位、ファーガソンの言う、「世界における自身の立ち位置」によっても異なりうるのだ。さらに、すべての人が同質の時代を生きているのではない。同じ場所で、現在を含む、同じ歴史の期間を過ごしている人びとであってもだ。なぜなら、近代的な諸社会と資本主義的な諸経済に必ずつきまとう不均等性が、国内、都市内、共同体内、さらにこれら相互の間に存在しているからである。G8参加国のように裕福な国で暮らしているか、あるいは、自分や家族が割に経済的な余裕(10部屋の家とまでは言わずとも4部屋ほどの家にあたるような)を持っているとしたら、自分はポストモダンの時代を、すなわち〈モダニティ〉の過ぎ去った時代を生きている

1 James Ferguson, *Global Shadows: Africa in the Neoliberal World Order* (Durham, NC: Duke University Press, 2006), pp. 18-19. (傍点引用者)

のだと考えるかもしれない。そしておそらく、切望したり、得ようと手を伸ばす先のものとして〈モダニティ〉があるとは思わないだろう。あるいはひょっとすると、そこに〈モダニティ〉ではない別の言葉をあてているのかもしれない。10もの部屋がある家に住むことができるだなんて幸運じゃないか、という人がいるだろう。しかし、世界の大部分の人びとにとって、〈モダニティ〉とは決して時代遅れの抽象概念ではない。〈モダニティ〉とはひとつの〈習俗的な範疇 folk category〉であり、文化人類学では次のように定義されるようになっている。「人びとが自分の生活を理解するため、何らかのアイデンティティを主張するため、自身の生活に対して抱いているある種の熱望に言葉を与えるために使用する概念である。こうした意味で、〈モダニティ〉についてよく考えなければならない。これをめぐる討議のなかから、政治的、文化的、社会的な権利主張のきわめて重要なものが形成されていくのである」。

しかしながら、〈モダニティ〉の定義は一枚岩でも普遍的なものでもないため、この概念が正確に何を意味しているのかを、真摯に検討していく必要がある。ここでは、近代というものの理解がここ数十年の間にどう変容したのか、そして、レソトやロンドンだけでなく、東京やデリー、リオデジャネイロなどあらゆる場所にとって、その変容がどのようなことを意味するのかに、広く焦点をあてていきたい。

### 〈モダニティ〉の、かつての理解とその変容

かつては敢えてその新しさが取り上げられてきた〈モダニティ〉が、いまや古びた概念のようになっている。19-20世紀という時代についての、これまでの歴史的な定義は、その特殊性を集めて積み重ねることに重点が置かれていた。これは成田龍一が「近代の文法」と呼んだものだ<sup>3</sup>。この特殊性のうちには、たとえば以下の諸点がある。まず国民国家という政治形態。これは20世紀はじめに50ほどだったところから、現在は200近くまでその数をのばした。そして、工業化および脱工業化時代の生産様式である資本主義は、全世界の社会経済的な生活を変化させ、社会主義経済もそのうちに含まれていた。次第に都市化がすすみ、共同体における生活の崩壊を経た大衆社会。国政へ参加するという権利主張をとともなう、国民という概念。ある人が日本人かフランス人か、はたまたナイジェリア人なのかを弁別するナショナル・アイデンティティ。これは近代的な国民国家の登場以前に必要とされることのなかった知である。そして、国際秩序への統合。今ではグローバリゼーションと呼ばれているが、近時の傾向として強まりを見せているのみで、新しいものではない。

これらの特質が、われわれにとって無感覚なほどに馴染んでいるのは、これらが〈モダニティ〉の大部を、実際に起きたものとして構成しているからだ。〈モダニティ〉はマルクスやヴェーバーらが叙述したように発展しなければならない／するべきである／するだろうという具合に、19世紀においては規範的だったものが、いまでは、これが現在における〈モダニティ〉のありようだというように、記述的なものとなった。たとえば、わたしたちは国民国家の世界に生きており、これに代わるような政治形態を提起できそうな見込みもほとんどない。近年における脱領土化やグローバリゼーションの広がりにもかかわらず、である。経済にかんしては、ヘルナンド・デ・ソトが、21世紀において「資本主義は都市における唯一の選択肢だ」と主張したことがよく知られている<sup>4</sup>。グローバルな相互依存の関係から抜け出すことも、世界のどこにしようと思えば逃れがたいものになった。このような

2 James Ferguson, "Theory Talk #34: James Ferguson on Modernity, Development and Reading Foucault in Lesotho," <http://www.theory-talks.org/2009/11/theory-talk-34.html>. あるいは, *Global Shadows*, p. 177.

3 成田龍一「近代の文法」『思想』845号(1994年11月)

4 Hernando de Soto, *The Mystery of Capitalism: Why Capitalism Triumphs in the West and Fails Everywhere Else* (London: Bantam, 2000), Ch. 7.

経験的な定義が、マクロおよびナショナルなスケールで焦点化されており、社会全体、政治形態、経済といった観点から近代化を意味づけている。近代化というものは分析概念としてあまりに鈍く、世界中で発展にむかって進行しているという単線的かつ目的論的な過程——19世紀以来のめでたい物語が、嘘にすぎないということを、いまや私たちは知っている——を前提としている。状況は悪くなり、良くなっているのではない。近代の歴史的な変化は、不均等をこそ、その基盤としつづけているのだから。

近代へ移っていくというよくある話は、たいていの場合、ナショナル・ヒストリーの2つの定型をとって語られてきた。ひとつは解放（たとえばフランス、アメリカ合衆国）の物語で、もうひとつは発展（多数の国々）の物語だ。いずれにせよ、これらのナショナルな過程は2つのベクトルに沿って進んでいった。まず、暴力による近代化がある。19世紀と20世紀初頭において、変化は宗主国や武力の脅威、主権といった世界秩序上の責務、帝国主義、国際法によって引き起こされてきた。20世紀後半には冷戦下の東西両権力、IMFや世界銀行といった国際組織、あるいは新自由主義経済という規範のもとで変化が生じた。これを私は、強圧的な近代 *coercive modern* と呼んでいる。

もう一方のベクトルは、熱望に導かれた近代化だ。そのなかで人びとは、近代化を遂げる変化へと手を伸ばす。国家および社会の改革者、国力を追求する軍人、市場と利潤の拡大を追求する資本家、階級や富、あるいは権力によって劣位にある人びと——近代という進路を自身にとって望ましいものと考え、それがヨーロッパに起源を置くだけでなく普遍的に応用できるものとみなしている人びとは、一般に考えられているよりも幅広い。変革を得ようとする人びとは、状況がそうさせたのみではなく、彼／彼女ら個人、家族、または共同体にとって有益であると考えたからだ。日本の農民がきわめて多くの子どもたちを学校に送ったことが19世紀後半の一例である。レボナが部屋の多い家を欲しいと思うのは、20世紀末の例だ。これを私は「熱望の近代 *aspirational modern*」とする。これらの人びとは、ある研究者が「約束手形 *the promissory notes*」と呼ぶものが〈モダニティ〉には存在していると信じていた<sup>5</sup>。近代的な生活が人びとに差し出し、示しているのはこのこと——すなわち約束——なのである。2世紀にわたるグローバル・ヒストリーを経て定義、経験された〈モダニティ〉がこのようなものだとすると、わたしたちはポストモダニストの理論家のように、こう言うだろう。今やわたしたち全員が近代的であり、それゆえ、何か別のものへと進んでいくことができる、と。しかし当然ながら、〈モダニティ〉の「約束手形」は不均等に、ある場所の一部の人びとのもとでのみ履行されるか、全く履行されないかのどちらかである。すると、過去数十年のあいだに〈モダニティ〉の定義が変化してきた。20世紀後半には、先にのべた2つの定型に沿った語りが支配的で、そこにはアフリカや南・東南アジアの多くの国々が植民地支配から離れていくことに焦点をあてた解放の物語があった。また、それらの国々がグローバルサウスや、これを越えて力を得つつある発展の物語もあった。しかし、物語の中心が近年のあいだに変化しているのだ。近代化という変化——あるいは、より良きものへの変化——が、国民国家というよりも個々人に焦点をあてた視点で記述されるようになっていく。GDPから見た国家経済の成長よりも仕事や暮らしから、または経済発展よりも人間の発展から、さらには、自由を抽象的に語るのではなく個人の選択可能性といった観点からの記述がなされている。だからこそ、ジェンダーや健康、そして教育といった側面が、発展という考えにとって重要なものになったのである。

### 日常的な近代

わたしたちはこのことを、「日常的な近代性 *everyday modernity*」として考えてもよいだろう。これは日々の生活における〈モダニティ〉、民俗範疇としての〈モダニティ〉であって、レソトに住むレボナがすすもうと望んでいた方向性でもある。発展にかんする言説は、いまでは「日常的な近代性」

5 Bjorn Wittrock, "One, None, or Many? European Origins and Modernity as a Global Condition," *Daedalus*, v. 129, no. 1 (Winter, 2000), pp. 37-38.

といったことについての指標を数多く含んでいる。おそらく最もよく知られているのが国連開発計画 (UNDP) の人間開発指数だ。これは世界の国々を、平均寿命 (健康)・知識へのアクセス (教育)・生活水準 (1人あたりの収入) という3つの尺度で格付けして、「すべての人のための人間開発」という目標を掲げている。1990年から、指標の焦点が「物質的な豊かさの追求」から「人間の福祉の拡充」へと、また「所得の最大化」は「能力拡大」へ、さらに「経済成長の最適化」が「自由の拡大」へと移った。国連開発計画の報告は、「単純な経済的豊かさよりも人間生活の豊かさ」を強調している<sup>6</sup>。「GDPの専横」から抜け出そうという努力にもかかわらず、人間開発報告書2016(2015年についての報告)ではノルウェー・オーストラリア・スイスが先頭に立ち、アメリカが10位、イギリスと日本がそれぞれ16・17位となり、計188か国中の上位51か国が「非常に高度な人間開発度」となっている。「低度の人間開発度」とされている41か国のうち多数はサブサハラ・アフリカ地域にあり、人間生活の豊かさを経済的豊かさとを分けるという課題の困難さを示唆している。最上位1%の人口が世界の富のうち46%を握っているという状態であるのだから、なおさらのことだ<sup>7</sup>。

国連のプログラム「人間の安全保障」——この言葉は1990年代になって導入された——は、国家の安全保障という従来の考えを、人権や人間の尊厳、基本的欲求をふくむ「人間中心」のアプローチへと拡充させるという試みで、類似の目標を公表している<sup>8</sup>。アメリカに拠点を置くNPO、Social Progress Imperative (社会進歩の責務) が作成した世界の「社会的進歩指標」は、人間生活の基本的欲求 (食料・水・衛生)、福祉基盤 (知識へのアクセス・医療・安全な環境)、機会 (権利・選択・参画・高等教育) を測っている。ほかのものに呼応して、この指標は「収入や投資といった、成功の従来の尺度」を避け、そうではなく「市民の基本的な欲求を満ち、生活の質を高めて持続させ、すべての個人が潜在能力を十全にひらくことのできる社会の可能性」を評価している。128か国についての2017年報告では、アメリカと日本が第2グループ (高い社会的進歩)、スカンディナヴィア諸国やカナダなどが第1グループ (非常に高い社会的進歩) に属し、サブサハラ・アフリカ地域の国々は下位2グループへと位置づけられた<sup>9</sup>。

国連の「持続可能な開発ソリューション・ネットワーク」が2012年にはじめて発表した「世界幸福度指数」は、主観的な認識を幸福度に関連付けた世界世論調査 (Gallup World Polls) にもとづいて155か国を格付けしている。調査結果は、一人当たりGDP (収入)、健康寿命、社会的支援 (トラブル時の相談相手がいるか)、信用 (政府や企業に汚職が無いという認識)、人生決定をおこなう自覚的な自由、寛大さ (必要性に応じた他者への贈与) という、6つの変数にしたがって評価されている。2017年報告ではスカンディナヴィア諸国とスイスがトップに立ち、アメリカ14位 (この国は上位10か国に入ることがなく、2018年報告では18位になった)、イギリス19位、日本52位、韓国56位、中国80位となっている。東アジアで最も幸福な国だとされる台湾は33位に入っている<sup>10</sup>。アフリカ諸

6 United Nations Development Programme, *Human Development Report 2016: Human Development for Everyone* (New York: United Nations Development Programme, 2016), p. 2.

[http://hdr.undp.org/sites/default/files/2016\\_human\\_development\\_report.pdf](http://hdr.undp.org/sites/default/files/2016_human_development_report.pdf)

7 Ibid., pp. 198-201; wealth, p. 7. The “tyranny of GDP” is frequently mentioned by Helen Clark, UNDP administrator from 2009-17, e.g., <http://www.undp.org/content/undp/en/home/presscenter/speeches/2017/02/11/helen-clark-key-note-speech-at-the-global-dialogue-for-happiness-where-is-happiness-on-the-global-agenda.html>

8 E.g. Introduction by UN Secretary General to the Report on Human Security to the General Assembly, May 20, 2010. <https://www.un.org/press/en/2010/ga10942.doc.htm>

9 Michael E. Porter and Scott Stern with Michael Green, *Social Progress Index 2017* (Washington, Social Progress Imperative, 2017); rankings, pp.4-5; map, p. 23. <http://www.socialprogressimperative.org/wp-content/uploads/2017/06/English-2017-Social-Progress-Index-Findings-Report.pdf>

10 John Helliwell, et al., *World Happiness Report 2017* (New York: Sustainable Development Solutions Network, 2017), pp. 20-22. <https://s3.amazonaws.com/happiness-report/2017/HR17-Ch2.pdf>

国の多くは、単一の大陸としてまとめあげるにはあまりに多様だが、この報告が「幸福の欠損」と呼ぶ問題を抱えている<sup>11</sup>。

当初は軽々しいニュースだとして批判（と皮肉）を受けた「世界幸福度指数」は、近年になって信頼を得つつあるが、それはとりわけ、調査結果がほかの指標から得られた結果に近似しているからである。これらの率先した取り組みは、ジョゼフ・スティグリッツやアマルティア・セン、ジャン＝ポール・フィトゥンなどによる GDP 中心主義への重要な批判から影響を受けている。彼らは 2009 年に発表した報告で、幸福や生活の質、環境の持続性などが、経済のパフォーマンスを測る基準として GDP の統計にのみ依拠するよりも適していると提起したのである<sup>12</sup>。

社会的な幸福を測った最近のものでは、ほぼすべてにおいてジェンダーの重要性がましつたように見える。世界経済フォーラムから毎年発行されている「世界男女格差報告書」は、全世界のさまざまな社会における経済、教育、健康、政治について女性に関わるデータを追跡している。2017 年の報告書では、スカンディナヴィア諸国が最上位にあり（想像どおりだ）、フィンランドとスウェーデンにはさまれてルワンダが 4 位となっている。イギリスは 15 位で、アメリカが 49 位、日本は表のかなり下のほう、144 か国中 114 位である<sup>13</sup>。

指標はほかにもある。経済協力開発機構の「より良い暮らし指標」や「アフロ・バロメーター」、「アメリカ・バロメーター」などだ。これらの指標のカテゴリーは、2030 年に達成すべきものとして国連が 2015 年に採択した「持続可能な開発目標」(SDGs: the Sustainable Development Goals) に、なんらかの点で関連している。（この目標は、2015 年までに達成されることになっている「ミレニアム開発目標」という 2000 年の目標に代わるもの）。新たに設定された「持続可能な開発目標」は 17 の項目を挙げていて、「貧困をなくそう No Poverty」や「飢餓をゼロに Zero Hunger」にはじまり、「健康と福祉 Good Health and Well-being」と「ジェンダー平等 Gender Equality」などを含み、「気候変動に具体的な対策を Climate Action」や「平和と公正をすべての人に Peace, Justice and Strong Institutions」といったものに至る。

SDGs は、「普遍的」（先進国にも発展途上国にも同等に適用する）——これは発展途上国のみを対象にした「ミレニアム開発目標」に対して新たな点だ——、「包摂的」（誰一人取り残さない）、そして「地球的」（人間社会の依存する地球資源を維持する）であろうという意図を持っている<sup>14</sup>。「近代 modern」という言葉は主として形容詞（近代技術 modern technology や近代医療 modern health care、近代エネルギー modern energy）として用いられているが、実際に SDGs で明確に思い描かれているのは、発展という名の社会的、国家的、国際的な発展のプログラムと、よりよい生活なのである。約束手形としての SDGs は、19 世紀や 20 世紀の〈モダニティ〉が目指したもののようを実現しがたいものとなりそうだが、SDGs の焦点は異なるところにある。国家の経済や安全保障よりも、「日常的な近代性」という場における、個々の人間の幸福や社会的生活に重点を置いているのだ。

## アフリカと、グローバルな近代

以上をふまえて、新しい、グローバルな近代ということができよう。このように改められた定義からすると、アフリカはどういった位置づけを得るのだろうか。44 か国からなり、12 億という

11 Valerie Møller, et al., “Waiting for Happiness’ in Africa,” *ibid.*, pp. 85, 108-9

12 Joseph E. Stiglitz, Amartya Sen, Jean-Paul Fitoussi, *Report by the Commission on the Measurement of Economic Performance and Social Progress* (2009). <http://ec.europa.eu/eurostat/documents/118025/118123/Fitoussi+Commission+report>

13 *Global Gender Gap Report 2017* (Geneva: World Economic Forum, 2017), pp. 10-11.

14 E.g., “Transforming our World: the 2030 Agenda for Sustainable Development” (Resolution adopted by the General Assembly, September 25, 2015). [http://www.un.org/ga/search/view\\_doc.asp?symbol=A/RES/70/1&Lang=E](http://www.un.org/ga/search/view_doc.asp?symbol=A/RES/70/1&Lang=E)  
Chart of the goals, <https://sustainabledevelopment.un.org/?menu=1300>

人口は全世界の16%を占めている。また、そのうち7割は30歳未満である。このアフリカは2050年までに人口が25億人まで増加し、世界総人口の4分の1に達すると言われている。これらのそれぞれ全く異なる国々を、世界の人びとはしばしば、ひとつの大陸という視座のうちに組み込んでしまう。しかも、腐敗した国家や泥棒政治、HIV、悲惨な貧困といったことに頻繁に言及しながらだ。これに似た見方が、世界銀行やIMFによる1980年代の融資を受けるための構造調整の要求や、1990年代から2000年代の債務免除のために、「優れた統治」および開放経済という条件を求めるといふことの根拠になっていた。この「救いのない大陸」という、一般に悲観的で新自由主義的な見方は、21世紀はじめの10年で「立ち上がるアフリカ」というイメージとともに反証された。ただし、アフリカの経済成長をめぐるこの語りは、それ自体がある種のステレオタイプとなり、最近においてはテロリズムや内戦の描写によってさらに反証されてしまった。

発展途上にあつて最も貧困である地域の経済的な命運は、いまでも議論の争点でありつづけている。2007年には、世界の貧困層である「最底辺の10億人」のうち7割がアフリカに居住していた。自身が暮らす地域の政府や国際的な救済を受ける事のできる見込みはかすかで、それらの救済が真に対象としているところまでたどり着くのもしばしば失敗していた<sup>15</sup>。対照的に、2015年には上機嫌のエコノミストらが、「世界史上、地球上の貧困に対してこれほど大きな開発の進展が起きた時代はない」と、サブサハラ・アフリカ地域を含めた状況を言祝いでいた<sup>16</sup>。このような意見の分離はなにも新しいことではない。ただ、先に触れた指標に関連して、また国連の「持続可能な開発目標」に照らして考えれば、サブサハラ・アフリカ地域の国々の多くは依然として極度の貧困に苦しんでいる。これは、ごきげんなエコノミストらにすら認識されている事実である。乳幼児死亡率が著しく低下している一方で、アフリカの女性や子どもたちは未だに医療や教育、そのほか人間開発指数に含まれているような公共財から疎外されているのだ。

世界幸福度指数によれば、アフリカは最も不幸な大陸となっている。2017年の報告に収められた章のタイトルは、モーリタニアの映画監督アブデラマン・サシコが2002年に発表した作品から引いて、「幸福を待ちわびて *Waiting for Happiness*」と名付けられている。「生活貧困 *lived poverty*」（これはアフロバロメーターで使用されている用語）が増すほどに幸福が減っていくということは、驚くに値しない。レボナが暮らすレソト王国は155か国中139位だ。人間開発指数では、レソト王国は188か国中160位に立っており、暴力によって分裂している中央アフリカ共和国が最下位となっている。社会的進歩指標については、レソト王国が128か国中103位で、これに多くのサブサハラ・アフリカ地域の国々が続き、ここでも中央アフリカ共和国が最下位に立っている。しかし、世界男女格差報告書でのレソト王国はかなり上位の55位／144か国にあり、50位のイタリアからそう遠くない位置にあり、114位の日本のはるか上にいる。レソト王国の女性は医療や教育面で悲惨なほどに低いスコアとなっているが、政治的な権限（政府における女性）や経済的な参画とその機会について高いスコアを記録している。これは、男性に比して女性の方が不均等の度合いが小さいということの意味している。それは必ずしも女性の賃金や仕事、生活状況が改善されたということではなく、ある部分の男性と女性がどちらもうまく生活している一方でほかの人びとが貧困化しているものの、他の場所よりは平等に近いということである。

アフリカの人びとは何を欲しているのか、という質問に対する答えは、新たに設定されてきたグローバルな目標のなかで、彼／彼女らが有するべきものと言われる内容に一致する。すなわち、人間の基本的欲求（食料や水）、医療へのアクセス、雇用（無職の若年層と、これを吸収する産業の欠

15 Paul Collier, *The Bottom Billion: Why the Poorest Countries are Failing and What Can Be Done About It* (New York: Oxford University Press, 2007), p. 7.

16 Stephen Radelet, *The Great Surge: The Ascent of the Developing World* (New York: Simon & Schuster, 2015), pp. 3-5.

如への対策)、生きるにふさわしい生活水準、教育、インフラストラクチャー(道路など)、腐敗の追放と民主主義の増進、といったことだ。「包摂」への願望もアフリカでは表明されている。この言葉はアフリカの人びとが将来について議論を交わす際によく聞かれるものであり、国連の開発団体において「持続可能な」という言葉が聞かれるのと同様である。「包摂」は不平等や無権利、そして個人や家族による選択が欠如している状態に反対するものだ。では、アフリカの人びとは、本人らの立場からして、何を求めたのだろうか。国内では内戦や腐敗した指導者、伝染病、土地を侵害していく気候変動。国際的には、国際援助が地域に根付かず対象へ届かなかつたり(医療の提供など)、外国からの直接投資を受けたりしている。外国からの投資は土地の収奪や、労働力を含む資源の搾取を含んでおり、かつての帝国主義権力だけでなく、中国や韓国、日本企業によってもなされている。投資やインフラ整備への資金提供、貿易、中国人労働者といった側面での、中国の影響力の爆発的な増大は歓迎されると同時に不満の思いをも招いている。その態度は、それぞれの国とそこでの社会経済的な状況によって異なっている<sup>17</sup>。投資や経済的な利益が一方にあり、他方では搾取や他方にある。これはヨーロッパ諸国による植民地支配からよく繰り返されてきたものだ。

しかしながら、将来に対する期待がアフリカに暮らす人びとの間で高まっているということ、とりわけ若年層の間でそうであるということも事実である。「より幸福」だとされている他の社会よりも、だ。ある研究によると、楽観主義はしばしば最も貧困で不安定な社会で強まる。そうしたところでは、そうした楽観主義が民主主義や市場に対する積極的な態度と相関関係にある。物質的な富それ自体が人びとの必要を満たすことはなく、消費至上主義的な近代性は、将来を確約することと同じく大きな重荷になる、と批評家らは論じている。こうした考え方はワンゲチ・ムトゥの映像作品『The End of Carry All』に表現されている。この作品は、頭の上にバスケットをのせながら、アフリカの風景を横切っていく女性を映しだしている。彼女はバスケットをたずさえ、重い足取りで歩いていく。そのバスケットは近代的な生活を象徴するものや虚飾に満ちている。家財道具にはじまり、自転車の車輪、そして、衛星放送受信用のアンテナ、石油プラットフォームや高層ビルなどが、そこに積まれている。物質的な〈モダニティ〉の重みは次第に増していき、彼女は地面に押しつぶされそうになってしまう。開発のネガティブな側面と、アフリカでの生活と労働における女性の役割を象徴している。この女性と、彼女に重くのしかかる荷物が約束された将来——あるいはそれは、世界の終わりでもある——にたどり着いたとき、近代を飾る数々の物体を積んだバスケットは、もはや手に負えぬ塊となり、崖からどん底に向かって転落してしまう<sup>18</sup>。

不均等な資本主義的発展の将来を映しだす、荒涼としながら説得力に満ちたこの映像に対して、別の異なる、しばしば楽天的でもあるような将来を、あたかもすでに到達しているかのように感じることもできる場面もある。たとえば、インドのように、アフリカの大都市では、若い世代をはじめとする人びとが電子機器を通じたつながりを持っており、その領域は「海賊的な近代性 *pirate modernity*」や「リサイクルされた近代性 *recycled modernity*」と呼ばれている。そこでは携帯電話をはじめとする機器が分解されて別の用途にあてられ、インターネット接続環境と、そこで電力や資本の欠如を切り抜ける有能な牽引者のつくる、影に隠れていながらも活発な経済圏が生み出されているのである。コンピュータの故障や、陳腐なデジタルメディアの品質低下といった技術的な欠陥は、単に障害をもたらすだけでなく、創造性を刺激する。ナイジェリアのカノや南アフリカ共和国のソウェトのような大都市で、その地域の音楽や映像を創作していくといったことに対し、阻害にも促進にもなる現代のメディア使用をめぐ

17 Fei-Ling Wang and Esi A. Elliot, "China in Africa: Presence, Perceptions and Prospects," *Journal of Contemporary China*, 23, no. 90 (2014), pp. 1012-32.

18 Wangechi Mutu, "The End of Carrying All," Venice Biennale 2015: All the World's Futures. Born in Kenya in 1972, the artist lives and works in the U.S.

る研究から、日常的な——そして熱望の——近代性における新たなテクノロジーの存在が明らかになっているのだ<sup>19</sup>。

### 日常的な近代性とグローバルな責務

わたしたちが本当に「すべての人のための人間開発」を、国連が宣言したように追求していくのであれば、思考と行動のきわめて大きな転換が、国内および国際的な場において必要とされるだろう。〈モダニティ〉はある意味、ロンドンよりもレソト王国においてこそ重要なのであり、それは私たちが未だに、21世紀における〈モダニティ〉が何を意味しているのかということへの考えを改められていないからだ。ほとんどの人は、ロンドンや東京が、かつての意味において近代的だということに異論を持たないだろう。しかし、日常的な近代性を目標としたとき、それは到達するにはまだはるか遠くに残されている。あまりにも多くの人びとが排除されているから、である。そして、排除される人びとが、それぞれの社会において占める位置というのは、いずれの場所にも通ずる傾向がある。マイノリティや周縁的なグループ、低所得者層や先住民、女性や外国人などだ。地球上に広がる不均等な近代性は国内における不均等な近代性と対応する。日常的な近代性は発展途上国だけでなく、貧困層や公民権を奪われた人びと、無力化された人びとなど、グローバル・ノースの中心部にもあてはまるのである。アフリカの人びとが私たちの注意を、彼／彼女らのよりよい生活への熱望に向けるのとまさに同じように、路上や地域にひろがって暮らしている、取り残された人びとにも注意を向けていかなければならないのだ。

レソト王国のような場所で、熱望の近代を阻害している要因は何であるのか？日本あるいは他の国の対外援助や政策、投資はレボナのような人びとの状況をより良く、あるいは悪くしてしまうのだろうか？男女格差について日本の順位をきわめて（非近代的に）低く、レソト王国から大きく離れた位置へと下げている国内のいかなる条件がはたらいているのだろうか？このような比較はほんとうに不快だと思ふかもしれないが、それが重要なポイントになっている。つまり、進歩やよりよい生活への熱望を満たすという点について、誰ひとりとして特権的な地位を占めることは無いのである。これからの課題だろうと私が考えているのは、グローバルな近代性を増進していくということ。国内および国外にわたって、レボナが「そこに向かって、私たちは進んでいきたい」と述べたように、——より良い、より人道的な、「世界における自身の立ち位置」に向かって——近代性を押し進めていくということである。すべての人びとのために、あらゆるところで、日々の暮らしのなかで。

翻訳：小美濃彰（東京外国語大学大学院 国際日本専攻博士後期課程）

19 Ravi Sundaram, "Recycling Modernity: Pirate Electronic Cultures in India," *Third Text* 13, no. 47 (Summer, 1999), pp. 59-65; Brian Larkin, *Signal and Noise: Media, Infrastructure, and Urban Culture in Nigeria* (Durham, NC: Duke University Press, 2008); Gavin Steingo, "Sound and Circulation: Immobility and Obduracy in South African Electronic Music," *Ethnomusicology Forum* 24, no. 1, pp. 102-23.